

嵐牛

友の会便り

第五号

2016.8.6 発行

〒436-0004

掛川市八坂434-1

嵐牛蔵美術館

伊藤鋼一郎

携帯番号

090-1472-2972

Eメールアドレス

takumise@

titan.ocn.ne.jp

目次

- [1]嵐牛四天王の子孫の
すべてが判明
伊藤鋼一郎
- [2]柿園友垣抄(五)
加藤定彦
- [3]嵐牛四天王の句碑(1)
倉島利仁
- [4]解説・鑑賞の会
今後の予定
- [5]嵐牛蔵美術館 近影

嵐牛四天王の子孫のすべてが判明

伊藤鋼一郎

八月の友の会では、四天王の一人大竹晴笠宅を御子孫の御厚意で訪問させていただくことが決まっております。大竹祐一様、奥様、宜しくお願いいたします。前回の友の会便りで書いた通り嵐牛時代の俳諧は連句・発句が中心で、優秀な俳友・門人が必要でありました。加藤先生から四天王の一人鈴木貫一の子孫を是非探したいとのことで、少ない情報を頼りに探し始めました。岡崎に近い横須賀の知識人の桑原武さんの確かな情報で鈴木貫一の御子孫の方と連絡が取れ、急ぎご挨拶させていただきました。詳しくは加藤先生の『柿園友垣抄(五)』をご覧ください。

当美術館収蔵品には大勢の入門短冊が残されていますが、嵐牛が門人を受け入れた最初の年、嘉永七年四月に鈴木貫一の入門短冊があります。前述の大竹晴笠は同年三月の入門短冊が存在します。鈴木貫一は『そのまま集』の中にもたびたび登場します。塚本五郎氏の著書では、嵐牛四天王は大竹晴笠、足立水音、加藤知碩、鈴木貫一と書いてあります。私が嵐牛遺産の整理を始めた当初より鈴木貫一の名前が出てきた記憶があり、嵐牛四天王は前記の四名がふさわしいと私も思います。

嵐牛の一生を掴むには、俳友・門人などとの交流状況を掴めば、どのような活動をしていたかがわかると思います。まず嵐牛四天王の残したものを調べれば沢山の情報が得られると思います。四天王の子孫の皆様、ご協力のほどお願いいたします。

以前よりたびたびお話しをしているように、現在加藤先生が大汗をかいて、嵐牛の一生をまとめた本を出版すべく編集作業を進めて頂いております。どのように纏めて頂けるか楽しみです。四天王についても取り込んでいただくと非常に面白いと

思いますがいかがでしょうか。出版の暁には出版の記念として二の丸美術館にて特別展等できないか夢見ており、現在交渉中です。

八月訪問の大竹晴笠宅では、加藤先生、倉島先生、小生が事前に訪問し収蔵品を拝見し、嵐牛友の会の会員の訪問に備えて準備をお願いしています。会員の皆さまに於かれましては、知り合いの方等お誘いあわせをいただき、訪問のほどよろしくお願いたします。見せていただく収蔵品の案は別紙送付します。事前にある程度内容を把握し訪問の準備をお願いします。見せていただくものは、掛け軸、マクリ、刊本、写本、短冊等です。作者は国学関係で賀茂真淵、栗田土満、八木美穂 俳諧では卓池門人、嵐牛、嵐牛門人等大勢の作品を見せていただく事になっていきます。

(「嵐牛・友の会」会長)

八月二十一日 第八回友の会

参加確定者(敬称略)(駐車場の関係で参加希望者は一報ください)

左記の方は六月定例会で決定しており連絡不要です

先生車	加藤 倉島
伊藤車	館長 事務局
鈴木車	鈴木敏子 岡本春一
御前崎車	増田慶信 他二名
菊川車	斉藤 鈴木安子
浜松車	河島三名

*知り合いをお誘いいただき多数の参加をお待ちします。

柿園友垣抄(五)

——始発期の鈴木貫一——

加藤定彦

嵐牛門下四天王で最後まで残っていた鈴木貫一については、『袋井市史』にも殆ど具体的な記述がない。入門時に提出した短冊には、「城東郡岡崎村鈴木治郎八常直、号晴岡居貫一(裏)嘉永甲寅(七年・一八五四)四月」とあって、通称と居所は明白。杖もかろき首途かどとてや月の旅」の句碑が袋井市岡崎の宗有寺にあり(塚本五郎著『郷土遠江の調査研究』昭和24年刊)、同句が「明治十三辰とし」の奥付のある追善句合(摺物)の巻軸に、

無々斎老人の初盆会を憚て

月のともことしは文のしをりかな 知碩

辞世

ひく杖もかろき首途や月の旅 貫一居士
と記されていて、墓を兼ねた碑と推察される。恐らく同寺のご住職にお願いすれば、過去帳の記録やご子孫宅も教えて頂けるだろうという甘い観測をしていた。

問い合わせに住職の返信が来ないまま、五月一日、伊藤会長と倉島、私の三名がクルマで同寺を訪問、境内によくは読めないものの、台石に「虚庵「椿谷(貫一息)」「社中」などと彫ってある句碑を探し当てた。人氣ひとけがないのが妙だが、本堂脇玄関のインターホンを執拗に鳴らすと漸く顔がのぞいた。ガラス戸越しに用向きを伝えると、先住が亡くなって、昔のことはよく判らないとの素っ気ない返答。とどめに、未開封の問い合わせの手紙を返された。

後日、会長や豊浜小の佐藤教諭の探索により貫一のご子孫宅が判明したとの情報が入った。しかし、俳諧資料はないとのことで一喜一憂。会長の熱意に応え、ご当主の鈴木健治氏が先代の遺された文書類の保管場所を、立て替えた二階建てを隅々まで搜索し、ついに見付ける。連絡を受けて会長が早速訪問、七月二日、撮影した俳諧資料や過去帳(注)などの写真データを送信して下さった。それらを一通りパソコンの画面で確認、これで最後の四天王・貫一の評伝が執筆できると胸を撫で下ろす。

七月十八日、見学会展示品の確認をするため大竹家訪問の予定となっていた。会長から、その午前中に鈴木家のご当主にお目に掛かり、貫一資料を見せて頂きませんか、とのお誘いを頂いた。送って頂いた肖像画のデータはやや不鮮明で撮り直したかったし、嵐牛に入門する以前、すなわち始発期の資料が『袋井市史資料集』に翻刻されているものの、不審なところがあり、是非ともお邪魔して確認したかった。ご当主のお話を伺ったあと、廊下に並べて頂いた資料群の中に目当ての一冊があった。不審におもった『袋井市史資料集』の『醸泉亭句会1』は、句合の開巻場所を句会の場所と誤解して書名としたものであった。句合は出題された季題の数だけ

発句を詠んで応募、催主がその詠草を集めて作者名を伏せて句だけを清書して評者に渡し、評者が点を掛け終わったあと、催主が高点句の作者名を記入し、作者別に応募句の合計点を計算し、天地人の順に勝者を決める。貫一の高点句は、

寝よと撞つづ(く) 鐘や涼しい最中を 岡ザキ 貫一

の二句で作者名が記入してある。以下につづく句は評価が低いので作者名が記されていない。それを資料集では誤解し、次の作者名が記入されているところまで貫一の句として翻刻している。句合の清書本巻末には評者鉄支の署名と「嗽斎」の朱印、「文政丁亥(十年・二二七)七夕/於醸泉亭開巻」、以下、天地人の勝句作者名と合計点数が書き入れてあり、最高廿八点の岡崎貫一が勝者の景品として清書本を贈られたのである。

評者の鉄支について知るところはないが、資料群の中に句合高点摺物の合本があり、なかに嗽斎(鉄支)評の「月並二分分」が含まれていた。江戸・ヲカザキ・中泉・ヲホツカ・アキハ・アハクラの作者の正五印が七句、六印一句と評者鉄支の各一句が一丁に彫られている。恐らく催主は岡崎の近隣、横須賀藩(三万五千石、藩主西尾氏)の関係者で、江戸と連絡の便宜がある立場にあった人物ではあるまいか。ほかにも「松風園(蘭莖)評月並五句合」や「皆至亭(松賀)評月次」「雪望亭(曙山)撰月並五句合」など地元評者、それらに江戸の「雪中庵(対山)評月並三題句合」も加わる。天保期以降、貫一はそうした俳壇環境の中で句作に励み、その果てに嵐牛門に帰したことが諒解される。

予想外の収穫としては卓池撰の句合摺物が三、四点あったことで、晩年、その名声は遠州にも浸透していた模様である。その一枚の催主は応山で、七点印の最初に、折際に又処もつ桔梗哉 シホ井嵐牛
と嵐牛句が見え、天保末頃、遠州連中の催す卓池評句合に主要メンバーとして参加していたことが窺うかが知される。

(注)「二代、道光貫一上座、明治十二年十月六日」と記録。
◆寛一肖像句讚(知碩画)



(「嵐牛・友の会」顧問)

つくづくと
老しる秋の
寝ざめかな
八十更無々斎寛一
知碩謹書(印)

嵐牛四天王の句碑(1)

倉島 利仁

嵐牛四天王の一人、足立水音(後号湛水)は、天保十四年(一八四三)、城東郡丹野村(現菊川市丹野)に生まれた。文久三年(一八六三)、周智郡平宇(現袋井市下山梨)の足立家の養子となつて六代孫六を継ぎ、同年秋に嵐牛に入門した。嵐牛への入門は、前年に入門していた、分家の足立孫八(俳号尺波)の手引きだったと思われる。入門後の水音の俳歴や人となりについては、足立順司氏『平宇足立家の歴史』(一九九九年、私家版)や、本会顧問加藤定彦先生「嵐牛とその仲間たち(七)―四天王の一人・足立水音―」(『蜻蛉』三〇七号、二〇一六年五月)に詳しい。

昨年末、伊藤会長とともに足立家を訪問する機会を得、様々お話しを伺うことができた。その折にお借りした資料の返却を兼ね、伊藤会長と加藤先生とともに再訪した折、足立順司氏から可睡齋に湛水の句碑があることを教えていただいた。句碑は、可睡齋総門と山門の間の弁天堂近く、酒塚観音の左の小高い場所にあった。

夏に入るやさくら林の常あらし 湛水

現在足立家に残されている聯に同じ句が書かれており、碑はそれを模刻したものでろう。一句は、陰暦四月十六日からの九十日間、僧侶が籠つて修行する夏安居の時期になると、この前まで満開だった桜もすっかり葉桜となり、その桜林の辺りには常に大風が吹いているという情景を詠んだものか。現在の可睡齋に桜はほとんどないそうだが、僧侶たちが修行したお堂の周囲には桜が多かったのかもしれない。

句碑の背面には、湛水の事績を述べた以下のような漢文が刻まれている。

足立孫六翁、遠江山梨町農也。明治十二年、任周智

郡長。廿五年、罷職後、推選衆議院議員二回。翁為人

謹嚴、精務直勸、興業殖産、以謀鄉村益利。有暇常嗜

俳諧、号松園湛水、秀句殊多、訓育門生数十人。四十

四年七月廿七日、溘然長逝。行年六十有九。諡曰

清心院松陰湛水居士。生三男六女、長純一郎嗣家。

乃銘曰、

黽勉竭力 利民益国 多年種徳 闔門蕃殖

明治四十四年十月 鴻齋石川英撰併書

一方、可睡齋の奥院からやや下つた参道の脇には、湛水の碑と対照的な小さな句碑があった。

花と雲かさなりあうて暮にけり 足立尺波

背面には次のように刻まれている。

中足立家三世

俳号尺波 市太郎

明治七年戊辰四月建之
同家四世孫八

案内板も何もなく、参道脇にひっそりと立てられた句碑に目を向ける人は多くないかもしれないが、春の夕暮れを詠んだ句は、可睡齋境内を見下ろす場所にふさわしからう。尺波句碑が可睡齋に建立されたのは、明治六年、廃寺となった秋葉寺から秋葉三尺坊大権現の御真体を可睡齋に遷座する際に水音が尽力したという縁もあつたのだろう。句碑は尺波の没後間もなく、水音の力添えを得つつ、嗣子によって建てられたのだろう。

さて、四天王の一人鈴木貫一については、前頁の加藤先生「柿園友垣抄(五)―始発期の鈴木貫一―」に詳しいが、その中でも触れられている宗有寺の句碑について述べておきたい。

現在、お寺の境内は残念ながら荒廃した状態だったが、山門を入った左手に貫一の句碑が残されていた。刻まれた句は、塚本五郎氏『郷土遠江の調査研究』(昭和二十四年、静岡大学教育学部浜松分校歴史学会郷土研究部)によれば、「曳杖もかろき首途や月の旅」とあつたようだが、碑の表面は浸食が進み、かろうじて「杖」の一字が確認できるほどだった。ただし、下部の台座は石質が異なるのか、正面に「虚庵／おぼろ／椿谷／社中」と四行にわたつて刻まれた文字が残っている。「虚庵」「おぼろ」がどんな人物か判明しないが、後日鈴木家で過去帳を確認していただいたことにより、椿谷は貫一の子で鈴木家三代であることが判明した。また、句碑の裏には次のように刻まれていた。

明治十四年十月

昭和四十七年九月再建

鈴木幾馬

過去帳によれば、寛一は明治十二年十月六日に亡くなっており、その二年後、三回忌に合わせて句碑が建てられたことが分かる。その後どのような事情があつたか分からないが、鈴木幾馬氏によって再建された際、台座は元のまま残されたのだろうか。

句碑を再建した鈴木幾馬氏もどんな人物か不明だったが、現在の御当主鈴木健治氏の祖父で鈴木家五代に当たる方であることが判明。健治氏は先祖の貫一のことやその資料について、祖父幾馬氏から聞かされていたそうだ。

また、鈴木家にはこの句碑についての書き付けが一枚残され、貫一の句の右には「これ外に思ふことなし夏の月 華好」という句が書かれている。塚本五郎氏『郷土遠江の調査研究』によれば、この句は「似色亭華好」との署名で同じ碑に彫られていたようだが、詳細は分からない。

(「嵐牛・友の会」幹事補佐)

講読・鑑賞の会の予定

第八回 八月二十一日(日)

会場 大竹晴笠家

磐田市福田(別紙地図参照)

時間 午後一時三十分～四時三十分

内容 大竹家御所蔵資料の鑑賞

第九回 十一月二十日(日)

会場 嵐牛蔵美術館和室 八畳十六畳

時間 午後一時三十分～四時三十分

内容 嵐牛蔵美術館所蔵資料の鑑賞

石川依平「宇津の山越」講読

「嵐牛発句集」講読 ほか

※ 第八回の友の会は、磐田市福田の大竹様のご厚意により、大竹家でご所蔵の資料を鑑賞させていただくことになっております。嵐牛四天王の一人大竹晴笠の遺品を鑑賞できる貴重な機会です。

※ 友の会に対するご要望等お聞かせください
また、友の会会員の方、その他嵐牛繋がりでご面白いこと
がありましたらご投稿ください。



百日紅の彩り 蝉の声 美術館にも本格的な夏到来です

平成二十八年八月六日 撮影

事務局 伊藤英子